

国公立大学第2次試験における入試教科・科目の変化

——昭和59年度から60年度への移行——

大学入試センター・池田輝政

本年の夏に、各国公立大学は昭和60年度の入試要項を発表した。旧教育課程から新教育課程に移行する最初の入試として各方面から注目を浴びたが、マスコミ各紙は、「2次重視」と「個性的な入試方法」の二つを主要な動きとして、60年度への移行を報道していた。

これら二つのうち、「2次重視」の動きは2次試験の配点比率の相対的増加や、2次試験要求単位数（あるいは科目数）の増加を内容とする。これは、共通1次試験に過度に依存することを警戒する立場からは歓迎されるが、受験生への負担強化を憂える立場からは批判される性質のものである。

59年度から60年度への移行段階で、こうした微妙な問題が存在していることは事実であるが、他方では、これらの問題を論ずるための資料としてより分析的かつ具体的な情報が、いまだ不足しているように思われる。

試験制度研究部門では、「教育制度における入学試験の位置づけに関する研究」の共同テーマのもと、国公立大学の2次試験科目を中心にした動向を追ってきた^(註)。59年度から60年度への動向について、詳しい報告は、12月発表の各大学の学生募集要項に示されるデータを使用して再集計を行ったうえで、別の機会に行う予定で

あるが、ここでは中間発表として、その動向に関する情報の一部を概括的に紹介する次第である。

対象と内容

59年度及び60年度の全国公立大学（私立大学が1校含まれている。以下同じ。）の第2次試験における教科・科目に関するデータを募集単位ごと（その定義は、注記論文の5頁参照）に作成した。

ここでは、国語・数学・外国語の主要3教科と呼ばれるものについて、両年度の学力検査科目の移行の特徴を紹介することにしたい。両年度間の移行は、以下で示すクロス図（図1～図3）に整理した。それは2次試験の出題型について、59年度を横軸に、そして60年度を縦軸に並べた作図である。図の中の数字は募集単位数を表す。これら募集単位の所属教育分野は、教員養成・芸術・体育関係を除いた文系・理系の諸分野である。また、産業医科大（私立）を除けば、残りは全て国公立に属している。

募集単位の総数は年度によって変化するので、クロス図においては、59年度から60年度の間で変更がなかった募集単位についてのみ集計した。

この結果、総数は1,111募集単位である。なお、全国公立大学における募集単位の単年度の総数は、59年度が1,174、60年度が1,211となっている。

国語の出題型

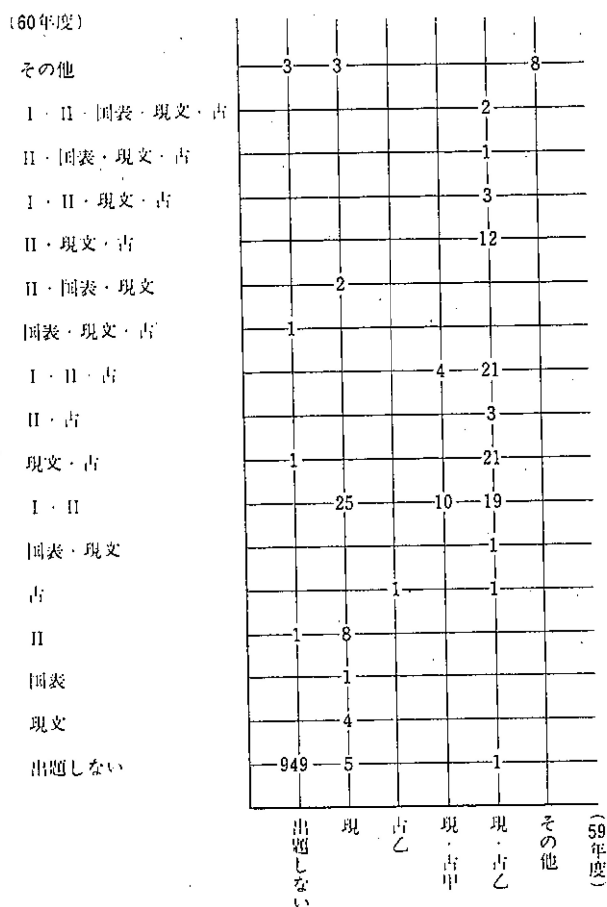
図1に示すように、新課程における科目の細分化に伴い60年度は出題型の種類が増えることになった。図中、「その他」に分類した出題型は、職業科目も含めた他の教科との組合せによる出題である。以下、図2及び図3においても同様である。

「出題しない」型を採る募集単位の集団をみると、両年度間でほとんど変化がみられず、全体の約85%を占めている。出題を行う残りの15%の集団は、文科系の分野に属するが、その中でもやはり人文系の領域に多くが集中している。

59年度に国語を課した型の中では、「現代国語・古典Ⅰ乙」の型を採った集団が最も多い。これに対し、60年度は「国語Ⅰ・国語Ⅱ」を採る集団が最も多くなった。この型には、59年度の「現代国語」、「現代国語・古典Ⅰ甲」そして「現代国語・古典Ⅰ乙」の型を採った募集単位から移行している。

学力の要求水準を比較するとき、旧課程の「現代国語・古典Ⅰ甲」は、新課程の「国語Ⅰ・国語Ⅱ」に大体対応し、旧課程の「古典Ⅰ乙」は新課程の「古典」に大体対応すると考えておこう。その前提に立てば、59年度から60年度への要求水準の変化に関しては、大体同水準の出題型に平行移動した募集単位が多いが、一部には

図1 国語の出題型の変化(N=1,111)



凡例：
 現……現代国語
 古甲……古典Ⅰ甲
 古乙……古典Ⅰ乙
 Ⅰ……国語Ⅰ
 Ⅱ……国語Ⅱ
 国表……国語表現
 現文……現代文
 古……古典

高低いずれかの方向に移動したものもあると、見受けられる。

数学の出題型

数学の教科も60年度に細分化が行われ、その結果、出題型の種類もおのずと大きく増えることとなった。

図からも明らかなように、数学を「出題しない」のは全体の約21%であり、その大半が文科

系とりわけ人文系に属する集団で占められている。

出題を行う集団においては、59年度は「数学ⅡB・数学Ⅲ」の2科目指定が多く、この出題型が60年度には、「代数幾何・基礎解析・微分積分」の3科目指定やこの出題型に「確率統計」を加えた4科目指定に比較的多く移行した。「代数幾何・基礎解析」が旧課程の「数学ⅡB」に、そして「微分積分・確率統計」が「数学Ⅲ」に対応すると考えれば、これら支配的な移行のパターンは、要求水準という観点からは余り変化していないようである。

59年度で第2番目に多い出題型は「数学ⅡB」の指定であり、60年度にはこの多くが「代数幾何・基礎解析」に平行移動している。しかし、旧数Ⅲ分野に対応する「微分積分」や「確率統計」を加えた出題型への移行も少なからず認められるところである。第3番目に多かった「数学Ⅰ・数学ⅡB・数学Ⅲ」型は、60年度にはそのほとんどが同水準に平行移動している。

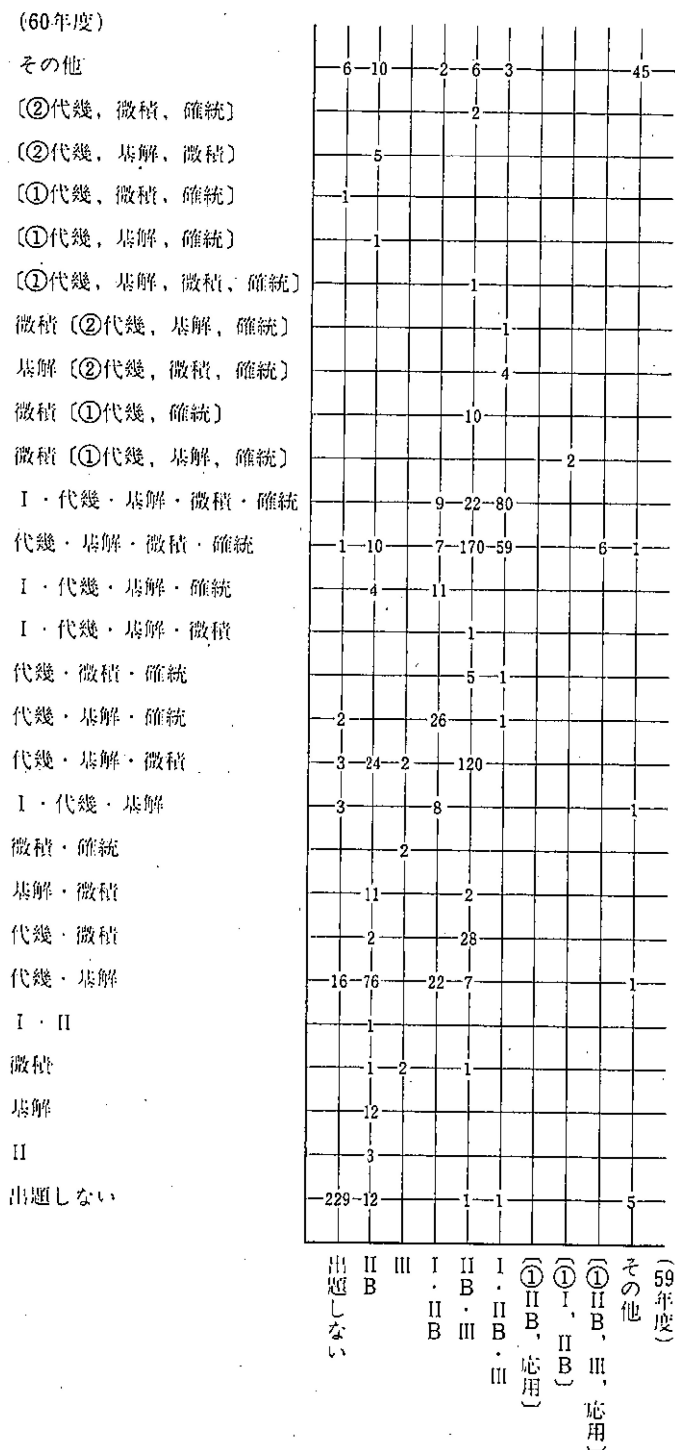
このように、59年度に支配的であった出題型の推移の特徴は、同じ要求水準のまま、60年度に平行移動したとみることができよう。

外国語の出題型

外国語の場合も先にみてきた国語・数学と同様に、60年度には、科目の細分化の影響により、出題型の種類が大幅に増加した。外国語の場合、出題型は科目選択方式が多く採用される点に特徴があり、国語や数学において科目指定方式が採用される点と対照的である。

59年度の出題型をみると、「出題しない」とし

図2 数学の出題型の変化(N=1,111)



凡例:

I, II, II B, IIIは、数学Ⅰ, 数学Ⅱ等の略。

応用…応用数学, 代幾…代数幾何, 以下同様。

①, ②は、1科目選択, 2科目選択の略。

()のない場合は、科目指定。

た集団が全体の約61%を占めており、その比率は国語や数学の場合と比べると、両者の中間に位置していることが判る。60年度への変化をみると、その約22%を占める集団が新たに出題を始めたことは、かなり特徴的な動きであろう。しかも、それらの動きは文科系のみならず理科系の分野にもわたっているのである。

出題を続ける集団においては、「英語B、独語、仏語」の3科目から1科目選択させる出題型が最も多く、60年度になると、「英語II B・英語II C、独語、仏語」(英語については2科目を1試験科目とみなす)の中から1科目選択させる出題型に移行する場合が多くみられる。

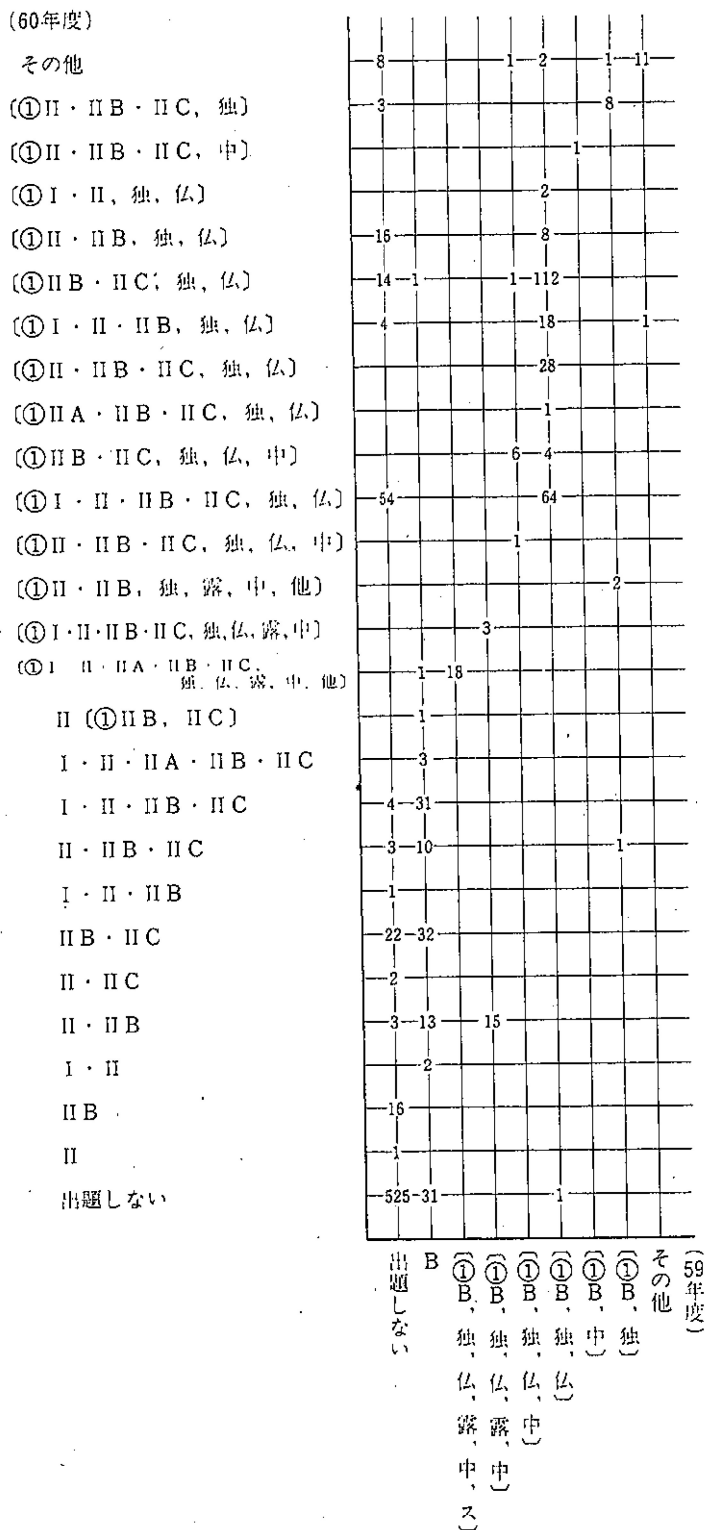
その他では、59年度では「英語B」の1科目指定を比較的多くの募集単位が採用しているが、60年度には、「出題しない」型、「英語II B・英語II C」の2科目指定、そして「英語I・英語II・英語II B・英語II C」の4科目指定などにその多くが移行している。指定型からは同じく指定型へというパターンが明確である。

おわりに

以上、第2次試験科目に関する昭和59年度から60年度への推移を簡単に紹介してきた。はじめに述べたように、まだ中間発表の段階にすぎないが、本報告が関係各位の御参考になれば幸いである。

(注) 池田輝政・中島直忠「国公立大学における入試教科・科目の変化とその特徴——昭和53年度と昭和54年度を比較して——」(研究紀要 No.9 大学入試センター1984)

図3 外国語の出題型の変化(N=1,111)



凡例:

B, I, II, II B, II Cは、英語B, 英語I等の略。
①は、1科目選択の略。[]のない場合は、科目指定。